

文学分野

「 翻 訳 」 の 諸 相

研究班代表

若島 正

はじめに

若島 正

「翻訳」の諸相 をテーマとする研究班の第一研究班では、翻訳のさまざまな問題が交差する場として、ウラジーミル・ナボコフがプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』を英訳し、それに膨大な注釈を付けた Aleksandr Pushkin, *Eugene Onegin*, translated from the Russian with a Commentary by Vladimir Nabokov (Princeton University Press, 1975) をテキストに選び、その集中的な輪読および討論をこれまで計7回にわたって行ってきた。本報告書では、今回から継続して、この文字どおり巨大なテキストの要約、さらにはそれに対する研究班構成員による注釈を発表していくことにする。

このテキストは、翻訳論においては頻繁に取り上げられる重要な文献でありながら、これまでほとんどまとまった研究が行われてこなかった。その理由は、プーシキン研究の立場からもナボコフ研究の立場からも、本書がいわば孤立した存在であるからだろう。プーシキン研究から見れば、韻律を完全に排して言葉の正確な意味だけに的を絞ったナボコフの英訳はおよそ標準的なものとは見えないし、その注釈にしてもいたるところに逸脱を含み、ナボコフという存在を無視して扱うわけにはいかないからである。ナボコフ研究から見ても、小説群が研究対象の中心であり、翻訳・注釈というジャンルでの著作の分析はまだまだ立ち遅れている。さらに、本書の圧倒的な分量もまた、研究者をたじろがせるのに充分なほどだ。

上記のような理由から、本研究班の英米文学研究者とロシア文学研究者の共同作業になる要約および注釈は、それが完成したあかつきには、プーシキン研究やナボコフ研究、そして翻訳論研究に寄与するところが大きいであろう。

本報告書では、『オネーギン』全8章のうち第1章(1-60連)を取り上げる。今回報告に携わったのは、執筆順に若島正、皆尾麻弥、鈴木聡、

中田晶子、吉川幹子の5名である。各報告の文責はそれぞれ執筆担当者個人にある。そのため、最小限の形式は全体として整えたが、スタイルの厳密な統一はあえて取っていない。ご了解を願いたい。形式としては、まず『オネーギン』の各連の内容要約、それに続いて で示したのがナボコフによる注釈の要約で、それに対する執筆者のコメントがある場合には【 】内で示した。そして最後に、執筆者による担当箇所の全体的な補足を付け加えた。

なお、執筆者の注釈・補足は、英訳版を別途作成して公表する予定である。